

## 令和2年度第1回(第36期)浜松市社会教育委員会会議録

- 1 開催日時 令和2年6月26日(金) 午前10時～午前11時30分
- 2 開催場所 浜松市役所本館8階 第5委員会室
- 3 出席状況
- |      |  |
|------|--|
| 委員   | 伊藤豪委員、晝馬るみ委員、河合亮子委員、<br>近藤潤子委員、島埜内恵委員、鈴木一夫委員、<br>高木一徳委員、中村朋子委員、松本孝久委員、<br>屋名池倫子委員、 |
| 事務局  | 中村文化振興担当部長、<br>平田生涯学習担当課長、中村生涯学習推進グループ長、<br>遠部指導主事、井ノ口指導主事                         |
| 欠席委員 | なし   |
- 4 傍聴者 2人(一般:0人、記者:2人)
- 5 議事内容
- 1 副委員長の選出
  - 2 第36期浜松市社会教育委員会の活動
  - 3 本市の主要事業における実績及び計画
- 6 会議録作成者 創造都市・文化振興課生涯学習推進グループ  
遠部佳代子、今井千晶
- 7 記録の方法 発言者の要点記録  
録音の有無 無
- 8 会議記録

- 1 開会
- 2 委員委嘱
- 3 委員長あいさつ
- 4 職員紹介
- 5 議事
  - (1)副委員長の選出
    - 事務局から、社会教育委員の設置根拠等を説明
    - 選出

(事務局)

副委員長については、昨年度第1回社会教育委員会において、「浜松市社会教育委員条例施行規則」第3条第2項「委員長及び副委員長は、委員の互選により定める」に則り、島埜内恵委員にお願いした。しかし、昨年度末の人事異動において、浜松学院大学から白鷗大学に異動された。また、本来36期社会教育委員の任期は令和4年3月31日までとなっているが、本年度で社会教育委員を代わることが決定している。今後の活動を鑑みても副委員長を他の方をお願いしたいとの考えを島之内委員から頂いた。いかがか。

(他の委員)

異議なし。

(事務局)

それでは、「浜松市社会教育委員条例施行規則」第3条第2項「委員長及び副委員長は、委員の相互により定める」となっている。この規則に従い、選出していただきたい。差支えがなければ、委員長にご指名頂きたい。

(伊藤豪委員長)

元県立特別支援学校校長、また現在は民生委員として、学校教育、社会教育の双方について幅広い経験や実績をお持ちの、晝馬るみ委員にお願いしたい。

(事務局)

他の委員の皆様はいかがか。

(他の委員)

異議なし。

(事務局)

晝馬委員、いかがか。

(晝馬るみ委員)

《承諾》

(2) 第36期浜松市社会教育委員会の活動

(3) 本市の主要事業における実績及び計画

■事務局から、資料1に基づき過去2年間の活動実績及び令和2年度スケジュールについて説明

■事務局から、資料2に基づき本市の主要事業における実績及び計画について説明

(伊藤豪委員長)

各区、様々な計画を立て、学ぶ機会を増やすための工夫がされている。内容はもちろん、託児サービスの導入やバリアフリーの工事を進める等の努力をしている。しかし、まだ課題はあり、その課題の中には各区共通したものもある。皆さんの意見を頂きたい。

(屋名池倫子委員)

全体的に託児付きの講座が増えている。託児を充実させることは、昨年度の社会教育委員会の中で出された課題であり、改善していただいていることが分かる。託児のニーズは高く、とても良いことだと考える。しかし一方で、ある地区の地域文化セミナーは、毎年同じような内容の講座しかなく、残念である。様々な分野の学習を提供するセミナーであるので、多くの年代の人たちが興味を持つような学習機会の提供をしてほしい。

(島埜内恵委員)

昨年も伝えたと思うが、南区でやっている公式 Facebook は良いので、他区でも増やしてあげると良い。ホームページは自分でアクセスする必要があるので、ハードルがあるし、広報紙等、配られるものも目を通り過ぎてしまう。LINE や Twitter 等、いくつかの SNS も活用することで、全世代をカバーできるのではないかと。枠組みはできているので、どう情報を流していくかが課題である。

(事務局)

SNS を広報手段としていくには、課題がある。協働センターでは、協働センターだよりを配布していることで効果もある。協働センターで実施する講座は、まずその協働センターのある地域の人たちに知って頂けるようにしている。しかしながら、今まで SNS が後回しになっていたのは事実である。SNS での発信は、協働センターごとが良いのか、区ごとが良いのか考えていく必要がある。どの情報をどのタイミングで出すのか、具体的に提示できるように基準も示していきたい。今後できる地区からやっていきたい。

(島埜内恵委員)

区でも、協働センターでも、発信するのが良いと思う。南区の SNS にリンク先を付ける等して、協働センターのサイトや講座の申込みフォームに遷移できると良いのではないかと。また協働センターで顔を見て申込みをすることも大切なので、その仕組みも残しておきながら、行けない人たちがプラスアルファで申し込める枠を確保してあげるのが良いのではないかと。また、申込状況が自動で表示され、確認ができると良いと思う。

(事務局)

今のやり方に、プラスしていきたい。そうすることで、今まで協働センターにたどり着けなかった世代の人達にも広げていきたい。

(鈴木一夫委員)

回覧板についてだが、回覧板に各戸配布のたより等を付けて回しても、そのたより等が取られることなく戻ってくることもある。それは、協働センターだよりが毎回同じ内容になっていたり、協働センターが住民の関心を把握しきれていなかったりするからだと思う。協働センターの職員が努力しているのは分かるので、もっと住民のニーズに応えられる仕組み作りをして欲しい。

(高木一徳委員)

5G は、自分や多くの高齢者にとって必要ないし、求めている。高齢者の目線で見たときに、地域の活力は高齢者が元気なら、地域は元気だと言えると思う。区の再編成で3区になり、各協働センターの人員が削減となった時、きめ細やかな支援をしていくことができるのか不安に思う。SNS 等を使えない人も多くいるので、近くに聞ける人、支援してくれる人が必要である。生涯学習推進グループが、協働センターといかに関わりを持ち、質も量も落とさせずに活動してあげることがポイントになるのではないかと。

(伊藤豪委員長)

協働センターは、中学校単位にひとつぐらいの割合で設置されているが、個人的には小学校単位にひとつずつ欲しい。そうすれば、もう少し協働センターが身近に感じられるのではないかと。自宅が協働センターから近い人は利用するが、遠い人は利用しないのが現状ではないかと。回覧板についても、各戸に行き渡る仕組みになっているはずだが、読んでいない人が多く、活用されてないと感じる。SNS を活用した新しい仕組みだと、高齢者が対応できないのが問題である。現在の機能を落と

すことがないよう工夫してほしい。

(中村朋子委員)

色々な地区で中学生のボランティアや高校生、大学生による講座が多く見られる。中学生でボランティアに参加してくれた子は、社会教育に興味を持ってくれる。また小学生が、大学生のボランティアと過ごすことで、大学生になったら自分もボランティアをやってみたいと興味を持ってくれる。このように、異年齢が交流できるボランティアやイベントを継続していってもらいたい。

(伊藤豪委員長)

学ぶ意欲のある人は、年をとっても学ぶ。若い時に学んでいなかったら、大人になっても学ばない。中村委員が言ったように、地域サービスから学ぶことの面白さを体験させたい。コミュニティスクールでは、協働センターの職員との連携が必要になるが、対応できるのか。協働センター職員の人員削減は、合理的ではない。必要な場所には、人員を十分に配置してほしい。

(河合亮子委員)

東部協働センターで生涯学習ボランティア代表をしていたが、今年代表を交代した。中学生からボランティアをしており、大学生になって一度ボランティアを離れた子が、就職して地元に戻り、またボランティアとして中高生のリーダーになってくれたため、代表をその子に譲ることにした。ずっと地域で継続して活動していると、良いこともあるということを知ってもらいたい。若い世代の参加が少ないという課題を解決するために実施した雄踏の講座や、地域のニーズに応じて実施した浜北区のスマホ講座等は、とても良いと思う。良いことは、他地域にも導入していけるようにすると良い。

(伊藤豪委員長)

新しい講座をどう展開していくかが、課題である。

(鈴木一夫委員)

協働センターは、どの世代の人が一番多く利用しているか。

(事務局)

高齢者の利用が多い。小中学生までは、子ども講座等に参加してくれることで、協働センターとの関わりがあるが、高校生になると関わりが切れてしまう。若い世代の利用者を増やすことが課題である。

(鈴木一夫委員)

積志協働センターでは、いろいろな活動をしている。文学や歴史の講座等は人気が高く、申し込みをしても断られる。年を取ると認知症予防のためにと、健康講座が人気である。自分の運営する施設で認知症の予防の講座を募集したところ、100人を超える応募があった。これを協働センターでやったとしても、ここまでの人数は集まらないであろう。いい講師を確保できるか、そして地域の人たちが誘い合って参加できる人間関係ができているかが大事である。また、施設の部屋を地域の民生委員と塾に行けない子どもたちに提供して、勉強を教えている。当初、協働センターで実施する予定であったが、講座室に空きがなかった。必要な人や団体に貸し出しができるよう、もっと工夫して運営するべきだと考える。

(伊藤豪委員長)

今の高齢者は、65歳まで働いているので、学びたいけれど学べない実情がある。疲れてしまっていて、学ぶことが難しい。小学生もおけいこ事をたくさんしている。ピアノ、英語、学習等、お金のある家庭は学べるが、できない家庭もあり、格差ができています。高い費用をかけずに、誰でも参加できるシステムを作れると良い。

(晝馬るみ副委員長)

魅力のある講座には、人が集まる。アンケート等で、講座を受講した人の声をその都度まとめ、次に生かしたり、協働センターの横のつながりを作って情報を共有して成果を広げていったりすることが、新しい講座を展開していく糸口につながるのではないかと。佐鳴台協働センターの地域活動団体が減っていると聞いたが、浜松市全体でも地域活動団体は減っているのか。

(事務局)

浜松市全体を見ても、地域活動団体つまり自主的な勉強会のグループが減っている。協働センターは、講座を提供する事業と、学習の場の提供の役割がある。自主的な活動を知らない人たちのために、その活動を紹介していくことに力を入れている。また、学習成果活用事業を通して、新しいサークル活動へ発展していけると良い。さらに、生涯学習講師として登録されている講師を整理することで、今後さらに協働センターに活用してもらえるようにしたい。

(伊藤豪委員長)

自主的な活動も高齢化が進み、数も減っている。活動を引き継ぐべき世代は、昔とは生活も環境も違い、一緒に勉強しようという機運にはならないのではないかと。本来なら、自主的に活動することが社会教育の原点であり、大事なことであると思う。

(高木一徳委員)

講座は生き物なので、時代によって減っていくものも、増えていくものもある。協働センターが、地域全体の事務局的な役割で関わってくれば、アドバイスがもらえたり、講師の紹介等をしてもらえたりするのではないかと。事務局は生涯学習教育活動の重要なポイントになると思う。

(事務局)

各地域で何が必要とされているかを把握し、その情報を使えるものにしていきたい。

(高木一徳委員)

一度協働センターの良さを知ってもらえれば、今後新しいサークルもできてくるのではないかと。

(河合亮子委員)

協働センターのコミュニティ担当の職員が、地域に溶け込もうと積極的に活動している。少しずつ、今までと変わってきていると思う。良いことだと思う。

(事務局)

地域コミュニティは大きな意味での、生涯学習。事務室の中ではなく、地域に出掛けてみなさんと関わることで、地域のニーズを知り、地域との関りを大事にしている。ぜひ一度、近くの協働センターで、コミュニティ担当職員の活動をご覧いただきたい。

(高木一徳委員)

生涯学習の範囲は広い。学校教育、文化協会、文化財、健全育成会、社会体育関係、社会教育、家庭教育等、とても広い分野なので、困っているところにフォローしていければ良いと思う。

(伊藤豪委員長)

活発なご意見に感謝する。生涯学習は自由度が大きいですが、課題も多く、やりがいのある分野。今後、形だけでなく、内容が伴う活動に深まっていったら欲しい。

6 連絡事項

■事務局から以下の内容について連絡

・浜松市と大学との連携事業【連絡資料】

・次回開催予定

令和2年10月～11月頃

7 閉会

9 会議録署名人 なし